

優秀賞 [高校生の部]

街頭インタビューを行った行動力と、礼儀や高齢者の知恵を次世代に伝えるための世代間コミュニティというユニークなアイデアが評価されました。

NPI学生小論文コンテスト2012
自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会
私たちがすべきこと、できること、
やりたいこと
入賞作品



世代間交流による 学びコミュニティの構築

桜蔭高等学校 3年

岩間 優 いわま ゆう

1 はじめに

自分たちの子どもの時代には、いま叫ばれているグローバル化はよりいっそう進化していると想像する。日本は国際競争力を高めながら、独自の発展を実現し、さらなる自国の強みを創り出している社会に私たちはすべきである。他国にはまねできない日本ならではの文化や技術、そして価値観を力にして、これまでの先人が築いてきた歴史をつながながら、未来に向けて新しい日本の創造を考えていきたい。

そのときに要になるのは人の知恵や知識だ。その知力を備えた人材を育成すべく、地域

教育のあり方を提言する。

2 子育て世代が 次世代へ伝えたい 『日本の学び』

日本独自の学びは必ずしも専門性の高いエリートを育成する教育だけではなく、礼儀を大切にする心、共助共生の精神など社会性の高さが特性のひとつである。また丁寧で緻密な技術力の高い仕事ができる強みも備えている。次世代に伝えるべき学びは多岐にわたると想像する。そこで、私は幼児の子育て

中にある母親に『子どもに伝えたい日本の学び』についての街頭インタビュー調査を実施することにした。調査は区立幼稚園が近くにある江東区南砂町商店街でおこなった。

回答者は50名(約6歳未満の男女園児の保護者)。インタビュー内容は以下の通り。

- 子どもにいちばん伝えたい日本の学びは？
(読み書き・計算、昔遊び、伝統行事、礼儀などジャンルを問わずに自由回答で)
- 教え、伝えるのはだれが望ましいか？

以上2項目の質問について回答いただいた。

子どもに伝えたい学びとして、読み書き・計算などの勉強面はほとんどの親が学ばせたいとは思っているが、いちばん伝えたいと思う選択肢として回答したのは4名、お手玉・けん玉・折り紙など日本独特の遊び文化が8名、正月や盆などの行事が10名、最も多かったのが25名の「礼儀」という回答だった。その理由を伺うと、「礼儀正しいことで、大人になったときに人間関係がスムーズになる」「あいさつがしっかりできるなど、人として基本的なことがきちんとできる子になってほしい」など家庭の教育方針が垣間見られた。また、その礼儀の教えを伝えるのはだれが望ましいかという質問の回答は両親が8名、祖父母が10名、地域の高齢者が5名で、礼儀を教え、伝えたいと回答した25名中でその担い手を両親よりも祖父母や地域の高齢者と回答している人のほうが多かった。「親として自分自身が礼儀を教える自信に欠ける」「別居

している祖父母には頼れず、地域の高齢者からも子どもに礼儀作法を伝えてほしい」という意見もあった。結果的に子育て世代も地域の高齢者の力を借りることを望んでいる回答が目立った。

このように親としても高齢者から学ぶ子育て支援を求めつつも、それが地域でシステム化されていないと実際には教えを受けることが難しい現状もあるのだと思う。教え伝える立場からも、そういった実践の場があればスムーズにできることも、昔のように地域でおせっかい年長者が機能していた時代とは違ってきているなか、現状では難しいようだ。

3 海外でも称賛される 日本の教えと学びを 世代間交流で再確認

私が昨年春に台湾を訪れたときのことだ。現地では、流ちょうな日本語で当時のことを熱く語るお年寄りに話を聞く機会を得た。台湾には日本統治時代に日本の中等教育以上を受けたトオサン(多桑)と呼ばれる人たちがいる。正直であること、勤勉であること、時間を厳守すること、親孝行すること。どれも日本統治時代に教わったことだという。そしてその考え方をいまもずっと心にとめているのだそうだ。台湾人には日本の精神に影響されたよい面とは反対に、日本に対して憎悪の思

いもあるのではないかと私は内心心配に思っていた。しかし、その後その不安が解消される話を聞くことができた。「残念な過去を忘れることはできないけれど、心を広くもって、憎むことや恨むことを忘れて相手を許し認めることも日本人から学んだ」と。さらに「苦労したからこそ豊かな人生になった」のだと聞いたとき、私はその不屈の精神に涙が溢れてきた。台湾の近代化に尽力したひとり、新渡戸稲造が提唱した「信」「義」「仁」などの武士道精神が深く台湾人の心に浸透していたことに、私はあらためて気がついた。

この体験を通して、私は地域社会のなかで、古き良き日本の学びを私たちの子ども世代にも伝えたいという思いをいっそう強くした。

4 世代を超えた地域社会での『学びコミュニティ事業』の構築

これからの時代にこそ、衰退してきつつある昔ながらの地域での教育を見直し、日常のなかで習慣的に学んだことを次世代へと、そしてグローバルにつなげていく必要がある。それにもかかわらず、現状は少子高齢化が進み、家庭や地域社会で異世代が関わり合う機会が減少している傾向にある。地域や社会と関わるきっかけが得にくいために、孤立

した若い世代やさまざまな不安を抱える高齢者も増える一方だ。そこで世代間交流での学びの場を設けることで、子どもの社会性や情操性を育てるとともに、高齢者世代の生き甲斐、人間関係の充実や社会参加による健康維持を促進する。

幼老施設の複合化は単にハード面だけでは意味がない。ソフト面での事例を多様化していきながら、常に活性化し続ける『学びコミュニティ事業』であるべきだと考える。子どもや高齢者だけに限らず、地域の住民全体を巻き込んだ縦、横、斜めの関係でさまざまな人との関わりを持つことができるようなシステムだ。例えば地域に外国人が住んでいれば、受け入れて多様性のある学び場にしたい。ハンディキャップのある人がいれば共に交わることで思いやりの心を養い、互いに共感しあえる社会をめざすこともできるだろう。経験豊かな高齢者からは積み重ねてきた専門的なノウハウを学ぶこともできる。何より自分と異なる考え方に出会うことでコミュニケーション能力を向上させることができる。異論を受け入れながら合意していく過程を学ぶことで、異文化を持つ世界へ自国の文化を発信することもできるようになる。

新潟県上越市の保育園士雇用事業は、核家族の増加で子どもたちが祖父母世代と接する機会が極端に少なくなったことをきっかけに2000年に始められた。高齢者との世代間交流による園児の情操教育、中高年世代

の雇用機会創出、保育士の現場での負担軽減などの効果が実績として認められているという。上越市のように契約形態が市の嘱託職員（非常勤一般職）としての採用によって雇用を生み出すことでなくても、ボランティアとして登録し、保育の補助などに参加し活動する場合など、さまざまなやり方で、学びを支えるシステムを地域に備えることは有用であると私は考える。活動内容も多様化していることが望ましい。例えば年間行事や伝承遊び、草花・生き物の世話などの整備、簡単な施設の修繕など大工業務や清掃、散歩や遠足などで交流しながら、子どもたちはその経験を通して学んでいくことができるからだ。

性化に関するアンケート]

2012年8月実施、有効回答数1,820件

調査主体：日本経済新聞社デジタルビジネス局、調査実施機関：日経リサーチ

- ・新潟県上越市「保育園士雇用事業」の概要資料
- ・新渡戸稲造『武士道』岩波書店

5 まとめ

日本には受け継いできた独自の文化があり、それを次世代へとつないでいく使命を私たちは担っている。自治体や国、企業を巻き込みながら『学びコミュニティ事業』を後押しする策を全国各地で体系化することをめざしたい。

参考文献

- ・日経電子版読者に対するインターネット調査「地域活